

愛知県立芸術大学における 「音楽学部基礎教育科目第2期改革事業」報告

Practical Report on the "Reform Project for Basic Educational Subject in the Faculty of Music (Phase 2)" at Aichi University of the Arts

成 本 理 香

NARIMOTO Rica

This paper is a report on the "Reform Project for Basic Educational Subject in the Faculty of Music (Phase 2)" that ran from 2020 to 2022. In 2019, I received a grant from the President of AUA in order to develop our original teaching materials for solfège education. During the development of the teaching materials, further missing assignment and new problems became apparent. Therefore, I thought it necessary to continue developing teaching materials and reforming classes after 2020. As in 2019, the solfège teachers and I, and joined by Associate Professor Taro Yasuno from 2021, worked together as a team to reform the solfège program, holding repeated discussions and composing assignments. In addition, online study sessions were held with a specialist in London to learn more about the British education system. In the third year, we also composed new assignments and recorded more than 100 assignments for dictation. As described above, the University's original teaching materials were created over a period of three years. This paper reports on the details of these three years and the characteristics of the newly created materials.

1. はじめに

本稿は、2020年度¹から2022年度の3年間にわたって行われた「音楽学部における基礎教育科目第2期改革事業」に関する報告である。

多くの音楽大学でそうであるように、本学も、音楽学部の学生は「和声」「ソルフェージュ」などをはじめとして、専門学習の基礎となる科目を学ぶ。2017年度から2019年度にかけて、音楽学部の作曲専攻作曲コース以外の学生が全員必修として履修する基礎教育科目の一つである「和声」の授業と教材改革を作曲コースの専任教員が中心となって行ない、その結果として新たな教科書を出版した²。一方、音楽学部の学生全員の必修科目である「ソルフェージュ」では、2011年度より、作曲コース専任教員の山本裕之³の働きかけで授業内容改革が始められており、筆者は非常勤講師として改革2年目である2012年からこれに関わった。また、2017年度に筆者が専任教員になったのを機に、ソルフェージュの主担当を山本より受け継いだ。そして、「平成31年度学長特別教員研究費」(2019年度)に採択

され、交付を受けて「新しいソルフェージュ教材の開発」を行なった⁴。この2019年度のソルフェージュ教材開発中に、さらに不足している課題や新たな問題点等が明らかになったため、2020年度以降も継続して教材開発と授業改革が必要であると考えた。そこで先述の2017年に開始した「音楽学部基礎教育科目改革」における「和声」の授業改革を第1期とし、2020年度からのソルフェージュ教材開発、授業改革を「音楽学部基礎教育科目第2期改革⁵」として、新規事業の予算要求をした。その結果、2020年度から2022年度の3年間予算を得て、ソルフェージュ教材開発、授業改革にあたることのできた。

この3年間、各年の非常勤講師、担当事務職員、録音教材作成のための演奏者等、多くの人の協力を得た。本学の運営上、各科目において非常勤講師や担当職員の交代が必ずある。将来的に授業方法や教材のさらなる変更や改良を行なうこともあるだろう。そこで、今後の授業運営のために、ここに3年間の記録を報告することにした。この改革事業では、授業内容の方向性は2011年度からの改革でほぼ定まりつつあったので、その内容に適した新たな教材開発と方向の微修正が中心となる。

前述の通り、ソルフェージュの授業内容改革はすでに2011年度から行われていたが、それぞれが各予算により事業名が付けられている(表1)。今回の報告は、表1の(5)の改革の内容についてのものである。

【表1】

	年度 ⁶	科目	予算	事業名	主担当
(1)	2011	ソルフェージュ	なし	ソルフェージュ改革1	山本
(2)	2012-2014	ソルフェージュ	理事長特別教育・研究費	ソルフェージュ改革2 ～音楽基礎能力を高めるために	山本
(3)	2017-2019 ⁷	和声	音楽学部基礎教育科目改革推進費	音楽学部基礎教育科目改革事業	山本
(4)	2019	ソルフェージュ	学長特別教員研究費	新しいソルフェージュ教材の開発	成本
(5)	2020-2022	ソルフェージュ	音楽学部基礎教育科目 第2期改革推進費	音楽学部基礎教育科目 第2期改革事業	成本

2. 2020年度(1年目)

2.1. 前期の状況

詳しく説明するまでもなく、2020年度は世界的な新型コロナウイルス感染症の蔓延(以下、コロナ禍)により、人々の生活は大きな打撃を受け、日本中のほとんどの学校が休校に追い込まれた。本学も4月中は休校、5月からの授業開始となった。ただし学生はまだ大学には来られず、大学のポータルサイトやオンライン会議システムの使用などで、遠隔授業を余儀なくされた。ソルフェージュも例外ではなく、教室での授業が大前提であるこの科目を、遠隔でどのように授業するのかという話し合いに時間をとられることとなった。また、教員はこれまでに経験したことのない授業方法の準備に忙殺され、2019年度に作成した教材を実際に使う場面もないまま時間が過ぎた。この間、教職員の努力により感染対策を講じた教室の環境を整え、6月1日には一部対面授業やレッスンが再開された。しかし、全履修者数が200人を超えているソルフェージュでは、まだしばらく様子を見る必要があると考え、遠隔授業を続けた。環境が整って、ようやく教室でソルフェージュの授業ができるようになったのは、

前期も後半をすぎた6月29日のことであった⁸。

2019年度末の報告(成本2021)にも記しているが、2020年度がこのような混乱の中で開始され、対面での授業が行なえたのは前期中4回のみであったため、前年度に学長特別教員研究費にて作成した各種の課題を、実際に授業で使用して検証する機会はかなり限られた。しかし、可能な限り作成した課題を使用し、各講師から報告を受けながら、いくらかの問題点を洗い出した。それを受けて、2020年4月から開始するはずだった基礎教育科目第2期改革事業1年目に制作する課題を決める話し合いができたのは、前期終盤の8月3日であった。

2.2.1.教材検討会議と作成した教材

2020年度の改革事業参加者は板倉ひろみ、遠藤秀安、鈴木宏司、高山葉子、丹羽菜月(以上作曲)、七條めぐみ(音楽学)、岩田彩子(チェロ)、小島千加子(ピアノ)の8名の非常勤講師と筆者である。検討会議では、前年度に作成した課題のブラッシュアップに加え、どのような課題が不足しているのかの確認を行なった。不足が確認されたのは「初級者用の聴音課題(特にピアノ以外の楽器による聴音課題)」「様々な音部記号による視唱のための導入課題」「基本的なリズム課題」等であった。基本的に不足しているのは、どのタイプのもので「初級者⁹のための課題」と「導入の課題」であることが確認された。特に不足していると思われた「様々な音部記号による視唱のための導入課題」を、夏休みの間に各自作曲し、後期始めの検討会議にて持ち寄って精査することにした。

2.2.2.ハ記号による視唱のための導入課題

様々な音部記号の読譜の訓練のためには、いわゆる「クレ読み」といわれるエクササイズで音高と音名を把握する方法がある(譜例1)。

譜例1:アルト記号によるクレ読み



しかし、この方法はあまりにも音楽的な要素が削ぎ落とされており、ここからスタートして半期の授業で新曲視唱の試験を受験できるレベルまで持っていくのは特に初心者には難しく、何より、ソルフェージュ改革が目指していた「機械的な訓練ではなく、音楽的な教材の作成」とは言い難い。さらに、伴奏付きの視唱のための簡単な課題が不足しているという指摘もあり、ここで作成するのは伴奏付きのアルト記号による視唱課題、小節数は4~8小節で、導入課題のため、難易度は「初級者用」とした。そのため、全員C-durとa-mollを1曲ずつ、さらにそれ以外は調性や拍子が偏らないように担当をあらかじめ割り振ったもの2曲の計4曲を作曲してくることとした¹⁰。

その後、数回の検討会議により、持ち寄った課題を精査し手直しをしながら、さらにテノール記号、ソプラノ記号の視唱課題を増やしていった。この課題は各音部記号36曲ずつを基本に、手直しや補充などをして、計109曲作曲された。

クレ読みのような機械的な練習とは違い、音程や調性も比較的易しい曲で様々な音符記号を読むことに慣れつつ、伴奏のピアノをよく聴いて自分で音の高さを探ること、またテンポ、アーティキュレーション、ダイナミクス等が書き込まれているのでそれらもよく読むことなどを同時に練習することが可能となる。これらを同時に行うことが困難な初級者でも取り組みやすいように、各課題短い曲となっている。

2.2.3.対声部聴音課題

本学に管打楽器コースが開設された1989年度から導入された「対声部聴音」は、2011年度の改革後も授業や試験で取り入れてきた。この課題は、教員それぞれが作成したものを各クラスで使用する場合もあったが、試験での対声部聴音を廃止した頃から、まったく行なわないクラスもあった。しかし、自分も声を出しながら、相手が歌っている（または教員がピアノで弾いている）旋律やベースをよく聴くというのは、アンサンブルにおいて重要な訓練であるため、今回あらたに「簡単」「普通」「難しい」という3種類の難易度の対声部聴音課題も作成することにした（譜例2、3）。

学生には一声部だけの楽譜（譜例3）を渡し、教員のピアノ演奏に合わせて歌い始める。教員は学生に渡していない方の声部を演奏する（譜例2と3の場合、教員は譜例2の下段を演奏する）。それを課題の難易度や学生の習熟度により3回から5回程度繰り返す。その後、学生は自分が歌っていなかった方の声部（教員がピアノで弾いていた声部）をすぐ歌うという課題である。この課題は合計38曲作成したが、学生が歌うパートは、上声用、下声用を作成し、どちらの声部にも対応できるようにした。

譜例2：対声部聴音（教員用）



譜例3：対声部聴音（学生用）



2.2.4.二重唱課題

ハ音記号の導入課題、対声部聴音を作成していくうちに、「ハ音記号をつかった二重唱課題があれば、学生同士のアンサンブルの練習になるのではないか」という意見が出てきた。話し合いの結果、学生同士のアンサンブルの練習のためにはハ音記号だけにこだわらず、ト音記号やヘ音記号も使用したもの、また、伴奏のあるもの、ないものというように、多様な課題を作成する方が各クラスの難易度に対応できるのではないかとということで意見がまとまった。「導入の課題」であることは意識しつつも、各曲での目的をはっきりさせた課題を作成することとなった。例えば「3度音程の練習」「半音階の練習」「カノン」など、各課題に目的を据えることとした。また、アルト記号同士の二重唱は初級者用に、テノール記号、ソプラノ記号を使用した二重唱は中級者以上用の難易度とすることにした。

ここでも、調性や拍子の偏りがないように担当を割り振り、それぞれ作曲し、合計で43曲の課題が作成された。

2.3. イギリスの専門家による講習会開催

2019年度に採択された学長特別教員研究費では、教員による教材開発のほか、実際に使用するため、また、教材作成の参考にするため、フランスの教育システムからフォルマシオン・ミュージカル、イギリスの教育システムのミュージシャンシップからABRSM(英国王立音楽検定)のテキストを中心に入手していた。そして同年度内にフォルマシオン・ミュージカルの専門家である講師を招いてのレクチャーと研究会を行なった¹¹。2020年度はイギリス在住でロンドン大学ゴールドスミスカレッジ音楽学部上級講師の松本直美氏を講師に迎え『イギリスにおける「ソルフェージュ」教育』と題したレクチャーと研究会を行なった。当初、松本氏の日本一時帰国の日程に合わせて行う予定であったが、コロナ禍のためそれが叶わず、Web会議ツールのZoomを用いて開催した¹²。

この講座ではABRSMに限らずTCL(トリニティ・カレッジ・ロンドン)による音楽検定の内容についても解説された。特に印象的だったのは、しばしば「専攻楽器別」の内容で講座が行われるということ、また、「書き取りによる聴音」をほとんど行っていないということである。前者では「聴く」という行為を様式理解に結びつけることを重視した各専攻の楽器に特化した訓練が行われる。例えば、ピアノ専攻には通奏低音や伴奏法、ギター専攻ではタブラチュア読譜、声楽専攻ではアカペラアンサンブルを行うなどである。後者の「聴音を行わない」については、2000年代から「聴音のような書き取りは古いからやめよう」という動きがあり、そのまま書き取りをやらないという風潮になったとのことであった。ただし、これに関しては現在弊害が出てきているのではないかというのが松本氏の意見であった。学年が進んでも正しい楽譜の書き方が身についておらず臨時記号の付け方も不正確であるなどの弊害である。ABRSMについて、教員は入手した教材から使い方やその内容を各自で独学していたが、それらの課題が何を狙ったものなのか等が解説され、理解がより進んだ。筆者は、改革に関わり始めた当初から、ピアノだけを使った従来の書き取りによる聴音には疑問もあるとは言え、完全にやめてしまうのは少し方向として間違っているかもしれないということを感じていたため、実際にやめたあとの結果について実例を聞いたのがよかった。質疑応答でも様々な質問が出て、活発なやりとりが行われた。

2.4. 転調課題の録音と聴音の音源作成

2020年度が終わりに近づいても、コロナ禍がおさまる気配はなく、クラス授業が基本であるソルフェージュの授業では、ハミングで音取りをできる程度で、歌を歌わずに授業を行なうということが続いていた。2019年度に作成した視唱課題は、相変わらず実際に使用してみでの検証ができずにいた。その分、他に2020年度中にできることを話し合った結果、2019年度に作成した転調課題¹³を録音するということになった。これは絶対音感に頼ることなく、機能や関係調を耳で把握できるようになることを目指して作成した課題で、全40曲作曲されていた。「絶対音感に頼らない」ということを意識し

て、それらを移調した楽譜も作成していた¹⁴。各曲に3~4つのパターンの移調楽譜を作成したので、曲数はのべ137曲であった。もちろん、これらは授業中に教員が実際にピアノ演奏すればよいのだが、その日の授業の計画を立てても、実際の授業の流れでは、一つの課題を行なった結果、用意していたものよりも別のものに変更した方が良いとなることも少なくない。そのような時にもすぐに対応できるよう、あらかじめ録音されたものがあれば、これだけの曲数の課題でもすぐ対応できると考えた。録音には本学学務課職員で録音担当の平田耕一があたり、演奏はピアノが専門の小島千加子、音楽学を専門とするが元ピアノコース出身の七條めぐみを担当した¹⁵。会場は本学の室内楽ホールを使用した。

また、2019年度に作成した、既存曲¹⁶による聴音課題のための授業用音源が、岩田彩子によりまとめられた。

2.5. 過去の試験問題の再利用

ソルフェージュの主担当が山本裕之になる前は、同じく作曲コース専任教員の小林聡が1990年度以降長年ソルフェージュの主担当を務めていた。その間のすべての定期試験問題が小林により、ファイルされていた。授業改革よりも前のため、旋律聴音、二声聴音、四声体聴音など従来のピアノを中心とした聴音問題も多いが、ピアノによる楽曲聴音(譜例4)、弦楽器のアンサンブル用初見問題などがあった。また、大学のクラス授業で行う聴音は、期末試験の成績により半期ごとクラスを再編成するため、しばしば学生から「その聴音の問題、前期に他の先生のクラスでやりました」というような指摘があった。過去の定期試験に使用したということは、すべての問題は1回使用したのみで、キャビネットに保管されたものである。つまり、これらを授業内で聴音問題や視唱問題として使うことが可能である。当時のグレードやクラス分けの方法は今とは違っているとは言え、レベル別に問題が作られていることは同じで、いつも課題数の不足に悩まされる初級者用にもちょうど良いレベルの聴音問題などが発見された。これらの問題すべてを一旦ファイルから外し、新たに複製しなおして、授業用ファイルとして整理した。前述の通り、本来ならば2019年度に作成した様々な課題の検証を行いたかったが、それらができなかったため、その時間を利用して、このように過去問題の発掘と選定を行なった。特に、「対声部聴音」「楽曲聴音」「リズム付き新曲視唱」などは、授業内容改革後も同じ理念で使用できることが確認された。

譜例4：2003年度前期試験「楽曲聴音」の冒頭部分



2.6. 次年度にむけて

2011年度の改革事業から、聴音の問題として実際の室内楽やオーケストラ作品を使用することが増えた。しかし、学生の聴音能力にはかなりのレベル差があるため、初級者には、ピアノ以外の音色、また、他にも様々な楽器が鳴っている中で一つの楽器の音を追っていく聴音はレベルが高すぎて難し

いという意見がしばしば出ていた。そのために、2019年度には様々なレベルに対応できるよう既存曲を使った聴音問題の解答用紙に工夫をした¹⁷。実際に、使ってみると、それでも難しい場合もあり、様々な楽器の音に慣れるための簡単な曲による課題が必要ではないかとの話になったため、翌年度以降に、そのような聴音問題の録音に取り組むことになった。初級者がピアノ以外の楽器の音での聴音に慣れるために、伴奏がついている簡単な歌など、聴音しやすそうな曲を選定した¹⁸。ピアノ伴奏と何らかのソロ楽器という組み合わせで録音することとしたが、具体的にどの楽器で演奏して録音するのか、調や音高などをどうするのか等の検討は次年度に持ち越された。

3. 2021年度(2年目)

3.1. 前期の状況

本学の雇用システム上、非常勤講師は毎年少しずつ入れ替わることになる。この年の改革事業参加者は板倉ひろみ、鈴木宏司、高山葉子、丹羽菜月、(以上作曲)、七條めぐみ(音楽学)、海老原優里、小島千加子(以上ピアノ)の7名の非常勤講師、2021年度から作曲コース専任教員に着任した安野太郎と筆者である。なお、この年度からソルフェージュの授業の主担当は安野に変更となり、筆者は基礎教育科目第2期改革事業のみの担当となった。

コロナ禍は相変わらず続いていた。本学は換気対策等を徹底して全国の音楽大学の中では、比較的早いうちに対面での個人レッスンなどを再開していた。この対策は、どのような気温や天候でも、窓やドアを開け放して行うことが基本であった。ホールも例外ではなく、コンサートを行う時でもドアを開け放して使用していた。2020年度の最後に選定した伴奏付きの簡単な歌から作成する聴音も、録音するにはどうしてもドアを開け放して行わなければならない、鳥の声やセミの声、その他の突発的なノイズが発生するため、なかなか録音を開始できずにいた。ピアノと楽器の別撮りなどの案も出たが、本学の録音施設や作業量から言ってあまり現実的ではなかった。検討会議では前年度同様、予定していたことができない場合の時間をどのように使うのか話し合いがなされた。

3.2. リズム課題の作成

これまでの検討会議の中で不足が指摘されていた課題に「基本的なリズム課題」があった。各講師が使用していた既存のテキストでは、難易度に偏りがあり、また、曲の長さも授業に気軽に取り入れるには長めのものが多く、初心者用の課題が足りないなどの意見が出ていた。そこで、初級、中級、上級とはっきりと難易度を分け、授業内でさっと取り入れられる短いリズム課題の作成に取り組むこととした。

2020年からコロナ禍となり、新曲視唱等の歌う課題を行うことができず、前期は筆記試験のみを行なった。しかし、いつまでも筆記だけではなく、何らかの表現を少しでもトレーニングして試験の科目に組み込みたいと考え、後期にはリズム打ちの試験を取り入れ、両手を使った2声でのリズム打ちを課した。前年度にこの事業で作成した視唱課題も、ピアノ伴奏付き、また、その後は二重唱など、アンサンブルを基本としたものであったので、リズム課題も試験と同じように2声や3声を中心とし

たものを作成することにした。2声の場合は1人で両手を使用して、または、2人でのアンサンブルでというように、同じ課題でも各クラスのレベルに合った使用方法が可能である。その応用として3声の課題も作成した。ここでも、それぞれははっきりと目標を定めることとした。レベル別の各拍子の曲の他、「連符(3連符、5連符など)」「混合拍子」「変拍子」などの目標を定めた課題を作成した。ここでも偏りの無いように、それぞれ担当を割り振った。作曲が専門ではない教員は初級用の課題を、作曲が専門の教員は全てのレベルの課題を作成し、合計で2声62曲、3声16曲が作られた。

3.3. 課題の確認、浄書と出版

ここまで、視唱とリズムの課題はかなりの数の蓄積がされてきたが、複数人数によりそれぞれに作成されていることや、難易度順に並べるために1ページに1曲しか印刷していないなど、何曲も授業で使うには、使い勝手が悪かった。それらをPDFファイルなどで切り張りしても良かったが、それには膨大な時間がかかる。また、各教員が使用している浄書ソフトも様々なため、ほんの少し音符のバランスや符頭の形や大きさが違うなど、不統一な要素が目につき始めた。また、これらを、毎回コピーして授業で配るよりも、どのクラスに所属していても、誰もがすべての課題にすぐでもアクセスできる必要があるのではないかという意見もあり、教科書としての出版を考え始めた。

前出の表1の(4)にある「音楽学部基礎教育科目改革事業」による和声の授業と教材改革により、新たな本学独自の和声の教科書を愛知県内の出版社である三恵社からオンデマンド出版し、教科書として採用していた。ここまで作成してきた課題も同じ方法で本学の教科書としてオンデマンド出版を目指すこととし、そのためには、全ての要素が統一された浄書が必要であるということになった。そこで、楽譜制作会社のクラフトーンに浄書を依頼することとなった。

ここで必要になるのは、この時点で仕上がっている課題の詳細なチェックである。膨大な曲数になっていたが、学内の2人で入っても大丈夫な部屋を使って¹⁹、2人1組で全ての曲を実際に弾いて、歌って、また、リズム打ちをして、細かいチェックを入れた。また、その際に、あまりに使い勝手の悪い曲は残念だが今回の掲載を見送ることにした。浄書に出すための楽譜のチェックと整備を続け、クラフトーンに浄書を依頼し、この後の検討会議はほとんどの時間を校正に費やした。

その後、和声と同じく三恵社から『視唱とリズムーハ音記号とアンサンブルを中心とした課題集』²⁰としてオンデマンド出版したが、その際、山本裕之に表紙のデザインを依頼した。また、本学のソルフェージュの教科書としては小林聡がソルフェージュ主担当終盤の2010年に『ソルフェージュ 視唱Iー高度な音楽的能力を養うためのー』²¹を当時のソルフェージュ担当教員たちと共に「愛知県立芸術大学ソルフェージュ研究会」として出版していたため、今回の出版も「愛知県立芸術大学ソルフェージュ研究会」という著者名を引き継ぐことにした。

2022年3月末に発行されたこの教科書は、引き続き現在も使用されているが、オンデマンド出版であることが今後の課題であり、本学以外の音楽を勉強する生徒や学生、または教員に使用する機会を提供できる方法を模索していきたいと考えている。

4. 2022年度(3年目・最終年度)

4.1. 前期の状況

この年の改革事業参加者は板倉ひろみ、鈴木宏司、高山葉子、丹羽菜月、(以上作曲)、岩田彩子(チェロ)、松下寛子(ピアノ)の6名の非常勤講師、安野太郎と筆者である。

第2期改革事業初年度の2020年度が、コロナ禍の1年目に重なったことにより、この事業の計画にも様々な狂いが生じていた。1.6.で触れたように、2020年度の終わりに、「初級者用の聴音課題(特にピアノ以外の楽器による聴音課題)」をピアノ伴奏と何らかのソロ楽器という組み合わせでの録音を翌年度行うと予定したものが、コロナ禍が継続したため、実行できていなかった。しかし、コロナ禍も3年目になり、感染対策について皆が知識を身につけ、安全にアンサンブルをできるような状況が学内に整いつつあった。授業では対策をとりながら視唱も行い、前期試験ではついに新曲視唱を実施することができた。この改革事業は2022年度には終わらせる予定であったので、年度内の録音の完成が必須である。そこで、前期の最後の検討会議にて、録音の実行のための話し合いを行なった。

4.1.2. ピアノ以外の楽器による初級者用の聴音課題録音にむけて

前述の通り、2020年度の終わりに、「初級者用の聴音課題(特にピアノ以外の楽器による聴音課題)」のために録音する作品の選定はすでに行なっていた。この段階でピアノ伴奏付きの歌(単旋律のもの)32曲を選定していた。ただし、すべてが「歌」であったために、音域がかなり狭く限られていた。また、せっかく録音の課題を作るのであれば、二重奏程度の簡単な器楽の二声聴音課題も録音するというアイデアも出た。2022年度中には録音を終わらせなければならないが、まだ少しコロナ禍の状況に不透明なこともあったため、とにかく録音ができるようになったらすぐに行なえるように準備をしておくこととした。

まず、ピアノ伴奏付きの歌32曲の、歌のパートを器楽で演奏するためのパート譜の作成にとりかかった。その際、原曲通りの高さに加え、1オクターブ高くした楽譜と1オクターブ低くした楽譜を作成した。また、この時点ではどの楽器で行うのかも決まっていなかったため、原曲の調により、B♭管、A管、F管からそれぞれ最適なものを選んで、移調楽器のパート譜も作成しておくことになった。このパート譜は授業で聴音をした後、「正解」として配布することが可能となる。

また、前述したアイデアの通り、作曲専門の教員が、器楽の二重奏の聴音課題を作曲することとした。ここでも、大事なのは「初級者用」ということなので、「ごく簡単な曲」と「それより少し難易度の高い曲」という2曲ずつをそれぞれ作曲してくることとなった(譜例5)。また、楽器編成をこの段階で決定しておき、重複の無いようにした²²。以上は前期の終わりの検討会議にて決定したことで、次回、後期が始まった後の検討会議にて各自作成したパート譜と作曲した器楽の二重奏をもちより、全員でチェックをすることになった。また、移調楽器の書き取り方を、実音と記譜音のどちらを使うのかについて、理想的なのは記譜音であるとしながらも、クラスによって聴音の実力の差が激しいため、クラスのレベルや学生の専攻に合わせて教員が臨機応変に対応することにした。そのため、解答として記譜音と実音の2種類を用意した。

譜例5：2本のホルンによる二重奏聴音課題（ごく簡単な曲）

訂譜音 Moderato

ここで懸念されたのは、録音の場所と誰が演奏するかということであった。本学の室内楽ホールは音響もよく、こまめな換気をしながらなら、少しだけドアを閉めて録音することも可能になりつつあった。しかし、あまり響きが良いすぎるのは、聴音の課題であるということを考えると、この場所は向かないように思えた。また、本学の録音スタジオは、残響や防音性などの観点から、聴音課題の録音には最適であるが、大きな問題はスタジオ内にピアノがないことであった。他の部屋をいろいろ考えてみたが、空調、雑音その他懸念事項が多く、場所の選定は難航した。しかし、実際に録音が行えるのは後期の後半ということになるので、それまでに、いくつかの可能性を検討することにした。また、演奏者は、大学院生や大学院修了してすぐなどの若い演奏家をお願いするのがよいのではないかとということになった。（ソルフェージュとはあまり関係ないが）この経験が若い演奏家のキャリア支援にもつながるとも、視野に入れた。

その後、後期始めの検討会議で、パート譜の訂正箇所等のチェックを全員で行い、期日までに修正したものを完成品として提出することとなった。「初級者用」とはいえ、やはりその中でも様々な難易度があり、また、各クラスのレベル²³も違うので、運用方法については教員が各クラスで工夫して行うということになった。

4.1.3. ピアノ以外の楽器による初級者用の聴音課題の録音

後期にはいり、すぐに録音準備を始めたかったが、大学の学事暦上、後期は教員も学生も忙しいためなかなか開始できず、教員も学生も時間が作りやすい春休み、つまり年度末に一気にやることとなった。専任教員の安野は録音にも明るいため、今回の録音は安野が中心となって行うこととした。また、ディレクターとしては、今回の改革事業だけでなく、これまで何度もソルフェージュ改革事業に参加してきた高山葉子を指名した。演奏者については、筆者から各専攻コース専任教員に、大学院生を中心に推薦を依頼した²⁴。ピアノ伴奏付きの旋律を録音する楽器は、フルート、クラリネット、オーボエ、ヴァイオリン、チェロとした。

懸念事項だった場所については、安野の判断で「大演奏室」という教室を使うこととなった。作曲学生1名にアシスタントとしてはりついてもらい、機材の準備等を担当してもらった。

また、器楽二重奏の聴音課題については、ピアノが必要ないため、本学の録音スタジオにて行なった。さらに、せっかくの機会なので、各編成であと2曲ずつ書き足すことにしたが、全員が取り掛かる必要はないとの筆者の判断で、筆者から高山葉子、丹羽菜月の2名に作曲を依頼し、筆者も含めて3人で器楽の二重奏を書き足した。

なお、この録音に参加した学生、修了生、スタッフは以下の通りである²⁵。32曲もの録音や、演奏者にとって新曲ばかりの二重奏の録音²⁶は、若い学生や修了生には大変であったと思われる。後に参加者から「聴音の課題としてずっと使われると思うと簡単なフレーズでもとても緊張した」という声も聞かれ、若い学生たちにはかなりのプレッシャーがかかったと推察されるが、全員熱心に取り組んでくれたのが何よりの喜びであった。

【表2】聴音課題録音の演奏者とスタッフ²⁷

氏名	楽器/役割	学年等	氏名	楽器/役割	学年等
安田 文野	ピアノ	D3年	小野 杏奈	ピアノ	D1年
岡田 薫子	フルート	D1年	滑川 敬一	クラリネット	M1年
山本 奈緒	オーボエ	M1年	石川 夕莉	バスーン	B4年
早野 舞花	トランペット	M1年	久保 健斗	トロンボーン	M1年
大橋 音子	ソプラノ・サクソフォン	B3年	野々 笑莉	アルト・サクソフォン	B2年
浅野 陽子	ホルン	B3年	宮本 結衣	ホルン	B3年
牧野 葵	ヴァイオリン	M修了生	稲田 悠佑	チェロ	M1年
豊倉 雅大	ヴァイオリン	B4年	溝口 琴音	チェロ	B3年
西村 晃平	録音アシスタント	B4年	高山 葉子	録音ディレクター	教員
安野 太郎	録音	教員	成本 理香	プロジェクト責任者	教員

録音終了後は編集等を安野が行ない、さらに、各教員が年間を通じてテキストとして所持しておくように、スコア、パート譜（聴音の解答）、CDの複製を行い、それぞれファイルして、教材として整えた。前述の通り、本学の雇用システムにより毎年数人ずつソルフェージュの非常勤講師は入れ替わるので、任期中はそれぞれ所有してもらい、任期が終わったら返却するというシステムにした。

5. 音楽学部における基礎教育科目第2期改革事業が目指したもの

ここまで、2020年度から3年間行なってきた改革事業について、時系列に沿って記してきた。ここでは、その改革で目指したものについて整理したい。

本学が、「ピアノを使った聴音のために作られた曲」で聴音し、「新曲視唱のために作られた曲」で新曲視唱をするという従来のソルフェージュから「既存曲を中心としたソルフェージュ」に大きく舵を切って、2011年度からその教材開発や授業改革に取り組んできたことは前述の通りである。その間、フォルマシオン・ミュージカルを始めとする外国の教育システムなどを参考にしてきた。しかし、大学の基礎教育においてそれらの外国の教育システムがそのままうまく当てはまるわけではなく、様々な問題点も浮かび上がっていた²⁸。従来のソルフェージュも含めて、それらの問題点を解消して教材を作成し、さらに作成した教材の検証を行い、本学のカリキュラムの中のソルフェージュで、様々なレベルの学生たちに対応できる教材と授業内容を目指してきた。「ソルフェージュ」という科目では、特に聴音や視唱のテキストは大量に市販されている。しかしそれらは、大学におけるソルフェージュ教育に簡単に適合しない。個人レッスンや音楽高校、音楽大学受験が前提となっているものも多いためである。近年フォルマシオン・ミュージカルをモデルとした教材も日本語で発売されつつあるが、それらがそっくりそのまま本学のカリキュラムに適合するわけでもない。また、多くの音楽大学でも同様

だと思われるが、大学でのソルフェージュは個人レッスンではなく「クラス授業である」という大前提がある。既存曲を課題の中心に据えた場合、入学時のソルフェージュの実力にかなりのばらつきがある本学では、クラス授業において初級者をフォローできる課題が圧倒的に不足していた。では、中・上級者の課題はどうかというと、初級者ほどの不足はないにしても、クラス授業の際に使いやすい課題は充足しているとは言い難かった。つまり、ここで目指したのは、圧倒的に不足していた「初級者をフォローする課題」を作りつつも、中・上級者も学習できる汎用性のある課題の作成であったと言える。また、3年間にわたって作成してきた課題を振り返ってみると、「クラス授業である」ことを活かして「アンサンブル」ができる課題を多く作成したのも、この改革事業の特徴であると言えることに気付く。例えば、1. 2. 2. で取り上げた「ハ記号による視唱のための導入課題」の作成は、初級者が機械的なクレ読みのトレーニングではなく、歌いながらハ音記号に慣れることを目指したが、ピアノ伴奏が全てについていることで「相手をよく聴いて歌う」、つまりアンサンブルの基本の学習にもなる。また、これらの課題は中・上級者は、弾き歌い、移調奏等の練習としても使用できる汎用性を持ったものと言える。リズムの課題においても、一人でも演奏できるが、誰かとアンサンブルもできるという形をとることにより、各クラスや学生のレベルに合わせて様々な使用方法が可能である。思い返せば、過去の定期試験では、「対声部聴音」が常に課されており、実は本学のソルフェージュの授業では長年「アンサンブル」を大事にしてきたと言えるのである。この課題を取り入れ始めた頃は、管打楽器コースの学生向けのものだった。今回新たにレベル別の「対声部聴音」の課題を作成し、課題を増やしたことにより、全専攻の学生のためのアンサンブル能力を鍛えるための課題が整備されたことになる。

日本で長らく行われてきた機械的なトレーニングを脱して、演奏や研究に、つまり実践に結びつく既存曲を中心とした学習を目指し、その一方では機械的であったトレーニングを捨て去ることなく改良しながら、やはり、最終的には実践に結びついていく課題の作成が「大学のクラス授業」でのソルフェージュに適合すると考えられる。どのレベルの学生も、少しでも今の自分のレベルよりも前に進めるような課題と授業作りを目指したのがこの「音楽学部基礎教育科目第2期改革事業」であったと言えるのである。

6. おわりに

この報告の作成のため、2019年度の「学長特別教員研究費」による「新しいソルフェージュ教材の開発」と、2020年度からの3年間における「音楽学部基礎教育科目第2期改革事業」の議事録や、作成した課題を振り返った。この間に作成した課題はかなりの曲数にのぼる。これは、チームとしてソルフェージュ担当教員が全員で取り組んだ結果である。筆者一人では絶対に作成できなかった。その結果として、オンデマンドではあるが1冊の教科書としてまとめられたことは、大きな喜びである。

学内の話になってしまうが、教育に関するアイデアが浮かんで新規事業を申請しても、簡単に予算が降りるわけではない。2020年度に向けてソルフェージュ改革を新規事業として予算申請した時には、他の専攻コースからも教育に関する様々な予算申請があった。このように複数の新規事業が申請されているにもかかわらず「ソルフェージュを優先するべき」と、他専攻の教員が声をあげてくれた。

実際には、一度は申請が認められずに差し戻されたのだが、その際に筆者以上に強くソルフェージュ教育の重要性を担当者に向けて説いてくれた他専攻教員がいた。ソルフェージュを優先させてくれた他専攻の教員たちには、心から感謝する。さらに、このような事業の場合、事務職員のサポートと改革への理解が不可欠である。この3年間は本学学務部学務課の浅井諒、山本静両名が担当職員としてサポートしてくれていた。事務的なサポートのみならず、この両名の改革事業への理解がなければ、私たちは教材作成にだけ集中することは不可能だった。字数の都合上本文では触れていないが浄書から出版に向けて膨大な作業があり、この二人がいなければ教科書の出版はできなかったであろう。心から感謝する。

さらに、議事録を読み返していくと、教材や授業改革以外にコロナ対策に関する話題もところどころで話し合われている。感染対策のためにこれまでとは違う授業準備に忙殺されながらも、歩みを止めずにあらたな教材作成と授業改革を継続できたのは、熱意を持ってこの改革事業にあたってくれた非常勤講師陣の真摯な取り組みのおかげである。さらに、最後の録音は年度末になってしまったため、実のところ筆者はピアノ伴奏付き聴音課題のみを録音することにして、器楽の二重奏の録音を諦めかけていた。しかし「なんとかします。やりましょう！」と安野太郎が背中を押してくれた。その結果すべての曲の録音が年度内に終了した。

多くの方々の熱意と協力により、この3年間の改革事業を行うことができたことについて、心より感謝する。ソルフェージュはこれからも授業や教材の改良が必要になっていくであろうが、ここまでの授業改革と教材開発がその礎となることを強く望む。

註

- 1 研究費名、予算名や事業名などは和暦によるものが正式名称であるが、本文の内容が平成と令和にまたがることから研究費名等の正式名称以外は西暦で記すこととする。
- 2 山本裕之(執筆責任)、久留智之、小林聡、成本理香、近藤譲(監修)『和声を理解するーバス音からの分析』アルテスパブリッシング、2023
- 3 本稿では、特別な場合を覗き、基本的に敬称や職位を略す。職位が記されている場合はすべてその当時のものとする。
- 4 この研究については『成本理香「愛知県立芸術大学のソルフェージュ教育における新しい教材開発」愛知県立芸術大学紀要(50)、2021、pp.133-147』に詳しく報告している。
- 5 ソルフェージュ改革は2011年に山本裕之がすでに始めていたが、予算名等により、音楽学部基礎教育科目改革事業として行った和声の授業改革に続くものとして、2020年度から2024年度のソルフェージュ改革を「第2期」と名前をつけた。
- 6 年度表記のため、例えば「2011」は「2011年4月から2012年3月」を指す。
- 7 予算を得て始まった「和声」の改革は2017年度からであるが、改革の担当となった山本裕之は、2016年度から担当クラス内で新たな教材の一部を使用しながら検討を開始していた。
- 8 通常、4月の第1回目の授業時に行うクラス分けテストを6月22日行い、対面授業を6月29日から開始した。
- 9 クラス名に「初級」「中級」とあるが、この報告の中では、クラス名ではなく純粋にそれぞれのレベルについて「初級者」「中級者」「上級者」という意味で使用している。なお、特に分ける必要のない場合には「初級者」の中には「経験が浅い者」や「初心者」も含めて記している。
- 10 作曲が専門ではない教員もこの課題では作曲に参加した。それぞれ作曲専門の教員がアドバイスしながら進めた。
- 11 成本理香「愛知県立芸術大学のソルフェージュ教育における新しい教材開発」愛知県立芸術大学紀要(50)、2021、p.137
- 12 なお、本学において、講師が実際に来学することなく、謝金の予算を執行するということは、これ以前はかなり困難なことであったが、コロナ禍により、来日そのものが不可能であったため認められた。ソルフェージュとは関係のない話ではあるが、コロナ禍がもたらした数少ない前向きな動きであると言える。
- 13 成本理香「愛知県立芸術大学のソルフェージュ教育における新しい教材開発」愛知県立芸術大学紀要(50)、2021、p.145
- 14 例えば、註8のページで記載されている曲はf-mollからAs-durに転調する課題であるが、同時にg-mollからEs-dur、e-mollからG-durにそれぞれ転調するように、移調した楽譜も作成しておいた。
- 15 感染対策のため学内の施設は、複数人での入室時にはドアを開け放して使用しなければいけない状況が続いていたが、転調課題はピアノ独奏であったため、録音が可能であった。
- 16 本報告中での「既存曲」とはソルフェージュ用に作られたものではなく、実際の音楽作品のことを指す。
- 17 成本理香「愛知県立芸術大学のソルフェージュ教育における新しい教材開発」愛知県立芸術大学紀要(50)、2021、pp.142-145
- 18 これらは、既存曲による歌の本から選定した。
- 19 この頃はまだ、感染対策のため複数人数で使用しても良い部屋が限られていた。
- 20 成本理香ほか「愛知県立芸術大学ソルフェージュ研究会『視唱とリズムーハ音記号とアンサンブルを中心とした課題集』三恵社、2022
- 21 小林聡ほか「愛知県立芸術大学ソルフェージュ研究会『ソルフェージュ 視唱Iー高度な音楽的能力を養うための』愛知県立芸術大学小林研究室、2010
- 22 ここで決めた楽器編成は、「フルートとクラリネット」「オーボエとバスーン」「トランペットとトロンボーン」「2本のホルン」「ソプラノ・サクソとアルト・サクソ」「ヴァイオリンとチェロ」である。
- 23 クラス分けやクラスのレベルについては、『成本理香「愛知県立芸術大学のソルフェージュ教育における新しい教材開発」愛知県立芸術大学紀要(50)、2021、p.134-135』に詳しい。
- 24 大学院生がいない楽器などは学部生から優秀な学生を推薦してもらった。
- 25 所属、学年は録音時のものを掲載している。
- 26 譜例5は「簡単」に属する。実際は難易度が高いものまでそれぞれ4曲ずつそろっていた。
- 27 Dは大学院博士後期課程、Mは大学院博士前期課程、Bは学部の略。学年は録音当時のもの。
- 28 成本理香「愛知県立芸術大学のソルフェージュ教育における新しい教材開発」愛知県立芸術大学紀要(50)、2021、p.135

参考文献

- 小林聡ほか愛知県立芸術大学ソルフェージュ研究会 2010『ソルフェージュ 視唱I—高度な音楽的能力を養うための』愛知県立芸術大学小林研究室
- 山本裕之 2013「愛知県立芸術大学におけるソルフェージュ教育の現在」『愛知県立芸術大学音楽学部音楽学コース紀要 MIXED MUSES』(8)、pp.85-100
- 山本裕之(執筆責任)、久留智之、小林聡、成本理香、近藤譲(監修) 2023『和声を理解する—バス音からの分析』アルテスパブリッシング
- 成本理香 2021「愛知県立芸術大学のソルフェージュ教育における新しい教材開発」愛知県立芸術大学紀要(50)、pp.133-147
- 成本理香ほか愛知県立芸術大学ソルフェージュ研究会 2022『視唱とリズム—ハ音記号とアンサンブルを中心とした課題集』三恵社

執筆者

成本 理香(音楽学部作曲専攻作曲コース 教授)